



岩手・大槌町の今

被災者と触れ合い

津波で全壊した旧大槌町役場前。町の臨時職員だった婚約者を「ここで亡くした白沢和行さん(29)は、觀光バスから降りてきた大学生たちに語り掛ける。「彼女に『愛している』と言えなかつた後悔がある。皆さんに伝えたいことは一つ。大切な人に『愛している』と言えるときに言って」。白沢さんが代表理事を務める「一般社団法人おらが大槌夢広場」の復興ツアーは、同事業では町をフィールドに、参加対象者に合わせて被災者

3.11 東日本大震災から3年



旧大槌役場前で学生たちを前に語る白沢さん(中央)

体験語り継ぎ人を育てる

と直接触れ合うプログラムが組まれる。その中で、訪れた人は生きる意味や働く意味、人との関わり方など、訪れた日は、震災の風化の恐れを食い止めようと、47都道府県の学生が東北3

目的だけではなく企業研修としても注目され、大企業のリピーターも多い。訪れた日は、震災の風化の恐れを食い止めようと、47都道府県の学生が東北3

県をバスで巡る「きつかけバス47」プロジェクトの一環として、岩手県などの大企業38人が参加していた。学生たちは旧役場前で白沢さんから被災当時の状況な

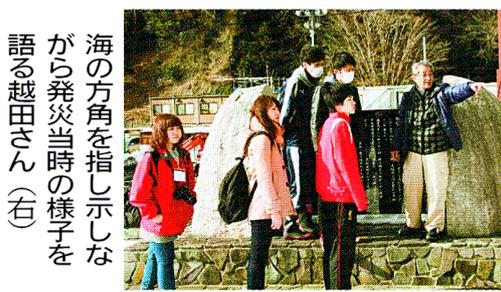
る。結局いつかは昔話になってしまうかもしれないけれど、私は体験を語るために生かされたと思っ

つて何もできていない。思いは何か尋ねた。白沢さんは「一生懸命生きることに、他人事も自分事として動くこと。チャレンジ精神」と答え、「大槌に多くの人を呼び込みたいというのは彼女の夢だった。今は私が彼女の夢を追いかけていきたい」とほほ笑んだ。

どを聞いた後、仮設団地内にある仮設商店街に移動。6、7人のグループに分かれ、語り部を務める商店主たちの話を傾けた。

風化にあらがう

雑貨店を営む越田征男さん(68)は、津波で流された元の店舗跡に学生を案内。店の近くにあって小高い石碑の上で髪を洗った学生が逃げた体験や、目の前で住民が流されていった様子などを克明に語った。そして「この先、町の姿が変わっていくと、どんなに話をしていても外から来た人は当時の様子を肌で感じられなくな



ズムには町民自身の中で進みつつある震災の風化にあらがう力があると考えている。「3年前、私たちはいろいろな大切なことを感じたはずなのに、忘れてしま

いられる」商店主たちが忘れまいとして学生に語ったものは、防災意識や被災地支援に対する感謝の気持ち、復興に懸ける前向きな姿勢、郷土愛などさまざまだった。学生たちはプログラムの最後に、町民との交流の中で何に気付いたのか、その気付きを誰のためにどのように生かしていきたいのかを熟考。その思いを風化させないよう手紙にしたため、町を後にした。

婚約者の夢を追う

学生たちを見送った後、白沢さん自身が忘れたくなく育っていることが大切」と。(丹羽恭太)

勝毎 電子版

(この連載は電子版で全編ご覧になれます)